

九州農政局は、飼料自給率の向上を推進しています。

自給飼料増産

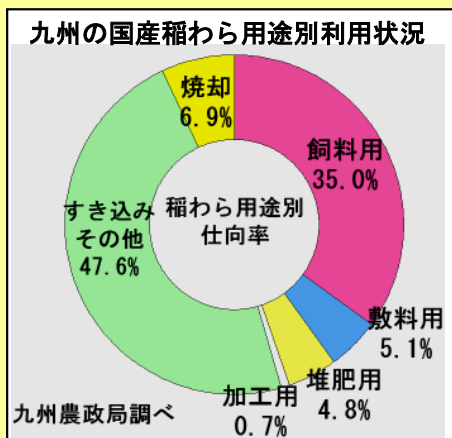
日本の食料自給率は40%と先進諸国の中で最も低く、特に畜産経営はトウモロコシや稲わらをはじめ、多くの飼料を海外から輸入しているため、飼料自給率は25%と低い。

そのため農林水産省では「食料・農業・農村基本計画」において食料自給率向上目標を定めるとともに、家畜の飼料自給率向上目標（平成15年25%から平成27年35%）を定めている。

近年、発展途上国による食料需要の増大やバイオエタノールの需要拡大による輸入トウモロコシの価格上昇など、畜産農家の経営状況は世界的な経済情勢の影響を大きく受け揺らいでいる。

このような状況の下、地域における畜産の持続的な発展を図るためには、国産粗飼料の増産・確保により、輸入飼料価格に左右されない飼料生産基盤に立脚した足腰の強い畜産経営を実現し、安全・安心な畜産物の生産・供給を行うことが重要であり、九州地域では以下の様な取組が実施されている。

■ 稲わらの収集～目指せ稲わら自給100%～



九州管内の稲わら発生量のうち約35%が飼料用として利用され、家畜の稲わら自給率は約90%となっている。

今後更なる飼料利用を推進するためには、管内に偏在する畜産地帯と稲作地帯間での広域流通体制の確立が重要であり、稲わらの発生量や需給状況等の調査、低コスト化へ向けた施設整備等を実施している。

■ コントラクターの活躍

飼養規模拡大や高齢化の進展による労働力不足に対応するため、飼料生産組織やコントラクターによる飼料生産作業の効率化・低コスト化が求められている。

九州管内に飼料関連作業を受託するコントラクターは126組織（H19）あり、飼料生産や堆肥散布、稲わら収集等の作業受託を中心に活動し、利用戸数、受託面積ともに拡大している。



ロールペラーでの稲わら収集作業

近年コントラクターとTMRセンターが連携し、地域の飼料生産の中核を担う取組が行われている。

■ 低未利用地の活用

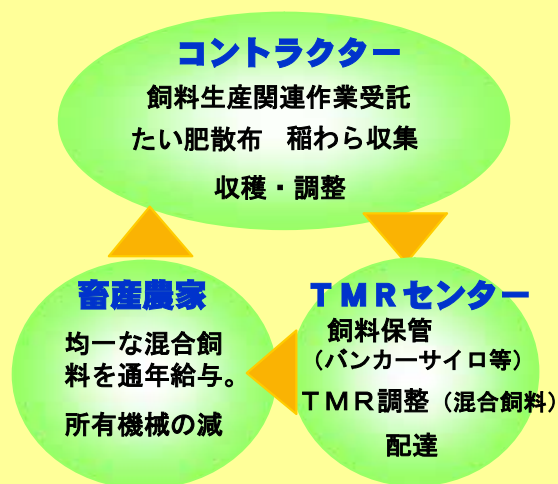
1960年に134%あった耕地利用率は、94年に100%を割り込み、07年には93%まで低下した。食料自給率向上のためには、耕地利用率の上昇、ならびに耕作放棄地の再利用等が重要となる。

機械や人の手が入らず遊休地化している農地や、水田、野草地等に牛を放牧する取組が広がっている。

放牧は飼養管理の省力化が図られるとともに、耕作放棄地解消や鳥獣害防止等に有効である。



耕作放棄地での放牧



多様化する飼料用稲 ～栽培から給与まで～

01 飼料用と食用はどう違うの？

わらとモミの両方を家畜の飼料として利用する「飼料用稲」は、湿田で栽培できる転作作物、飼料自給率向上の切り札として期待されている。

稲を家畜の飼料とするためには、低コスト生産が望まれるため、食用品種よりも「わら」や「モミ」が多収で、病害虫に強い等、栽培しやすい「**飼料用専用品種**」が育成されている。

専用品種は、地域特性（暖地型）や、WCS向け、飼料用米向けの超多収品種、WCS・飼料米兼用品種に大別され、用途に応じて利用される。

専用品種の普及
(暖地向き)

ホシアオバ クサホナミ
ニシアオバ モミロマン
タチアオバ クサノホシ

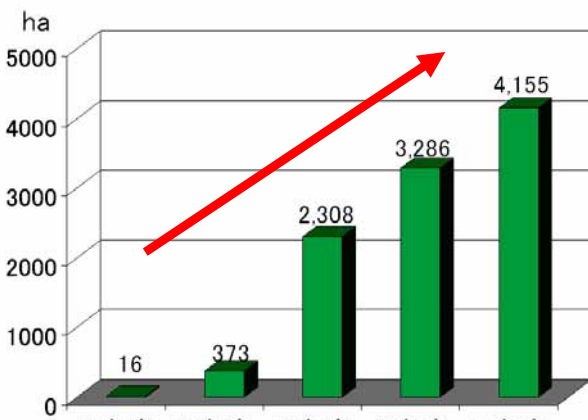
**低コストに
向けた取組**

機械化による省力化

直播栽培の実施
専用収穫機の開発等

02 飼料用稲の作付拡大

九州管内における稲発酵粗飼料作付面積



九州農政局調べ

九州における飼料用稲の作付面積は4千haを超え、全国の作付面積の約50%を占める。

地域内における耕畜連携（耕種農家による栽培、畜産農家による収穫・給与・堆肥散布）の進展により、作付け面積は順調に拡大している。

03 稲WCS (Whole Crop Silage)

	飼料用稲 (黄熟期)	イタリアン (開花期)	チモンシ (開花期)	トウモロコシ (黄熟期)
水分	62.7	76.4	14.8	73.9
粗蛋白質	7.0	9.7	8.0	8.0
粗繊維	26.3	34.7	36.2	22.7
T D N	55.9	57.6	54.9	65.9

(水分：原物中、その他：乾物中)

	繁殖牛(体重: 500kg)			育成牛(体重: 200~250kg)
	授乳	授乳なし	妊娠後期	
稲WCS (TDN57%)	8	9	8	2
乾草 (オートミックス)	3	3	3	2
濃厚飼料 (CP18%)	3.5	0.5	1.5	4~5

稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルより抜粋

飼料用稲を刈取適期（黄熟期）に収穫・調整すると、栄養価が高く（TDN55%、粗蛋白質6.7%）、発酵品質が良好で嗜好性の良い飼料となる。



**栄養価
嗜好性
が良い**

04 わら専用稲・飼料用米

従来の「わら」利用の他、近年は輸入トウモロコシの代替として「子実」を利用する「飼料用米」が期待されている。

飼料用米利用の普及へ向け、配合飼料への添加割合や、肥育牛・豚では肉質、乳用牛では乳量・乳質、鶏では卵質等について試験されるとともに、畜産物のブランド化による販売等が進んでいる。

採卵鶏への飼料用米給与と試験（例）：玄米を20～60%の割合で配合



採卵鶏では、飼料用米の添加率が高くなるほど卵黄色が薄くなるが、味や栄養成分等は一般卵と遜色ないという結果が出ている。